

「住宅地に建つ小さな障がい者施設」

ともの家活動室増築工事

報告者 企画：鈴木武 法人理事、新建会員

設計監理：小杉剛士、小杉建築計画事務所、新建会員



ここに紹介する 社会福祉法人 清水あすなろ福祉会は静岡市清水区にあります。

平成の大合併は静岡県都静岡市を政令市に格上げすべく旧静岡市との合併により清水区となりました。合併前の清水市は清水港を中心とした造船や重工業を中心とした活気ある街でしたがかつての面影もなく人口減少に歯止めが利きません。保守色が強い半面行政はどこか緩やかな寛大さを持ち合わせていました。今は官僚色が強く、かつて築き上げてきた清水の良さは一掃され旧静岡市の制度に一律統合の結果合併して良かったという市民の反応はありません。そんな風土の中にある 社会福祉法人 清水あすなろ福祉会 は「保育園・老人介護施設・障がい者支援施設」と三つの異なる分野の事業を運営している”市民立”の法人です。

昭和 45 年（1970）当時公立・私立でも産休明け保育が無い中、3 人のお母さんが給料を出し合い部屋を借り保母さんを雇って共同で産休明け保育を始めたのがこの法人の原点です。その後全国のポストの数ほど保育所の運動と呼応しながら、産休明け保育のできる認可保育園を作ろうと建設運動をスタートさせ昭和 54 年（1979）市民立の社会福祉法人 清水あすなろ福祉会「風の子保育園」（定員 120 名）が誕生しました。

平成 5 年（1993）日本が高齢化社会に向かい始めた時期、保育園をつくったお母さんたちが、自分の親をどうする？自分の老後は？じゃあ今度は老人介護の施設をつくろうということになり、あすなろ福祉会の理事と、周りのたくさんの応援する人達が集まり「清水に老人介護施設とケアハウスをつくる会」を立ち上げ運動を始めました。資金は会費と資金カンパ集めの諸行事、不足分は借入で、運動をおこし 5 年後の平成 10 年（1998 年）「特養ホームあすなろの家（特養 50 名、ショートステイ 20 名、デーサービス・ケアハウスしみず 20 名）」が開設されました。

昭和 63 年（1988）全く別のルートで障がい者が重くても、通える施設が欲しいという障がい者や家族の切実な願いから、障がい種別や程度にこだわらず、一人ひとりが精いっぱい、生き、働き、明るく豊かな人生を築くことを目指し「清水市重症心身障害児者を守る会」と障害児問題勉強会「ほうせんか」が中心となって市内の民家を借り共同作業所「ともの家」を開設、作業所の傍らで親たちが手作りパンを作り作業所の運営資金に充てる活動を始めます。無認可による経営の苦しさ、民家の老朽化に直面し平成 5 年（1993）建設委員会を発足させ、利用者の 1 人の親から土地を提供いただき、度重ねる対市交渉により独自の補助金も受けて平成 6 年（1994）末現在地に建物を完成させ移転再出発をします。その後法人化を独自に検討するも種々の困難に直面

しそんな時、志を同じくする仲間が多くいるあすなる福祉会 に声をかけます。賛同を受け平成 14 年（2002）社会福祉法人清水あすなる福祉会に参入、今回のプロジェクト”ともの家活動室”増築工事の直接事業主体者となります。

今回のプロジェクト”ともの家活動室” 建設に至る経緯

令和 4 年（2022）10 月台風 15 号で清水区は 50 年ぶりの大水害を被り水源が破断し、ともの家地域は≒1 週間ほどの断水に見舞われ施設運営に大変苦勞しました。南海トラフ地震の想定域にある当地はかねがね地震防災対策に腐心してきました。緊急時の仲間の安全確保、帰宅困難者の一次預かり、避難先での共同生活など到底できない重度の仲間達の一次的生活の場の確保を喫緊の課題とした施設の意向を法人は承知し整備することを決めます。近隣別棟での建設は手狭になってきた既存施設における仲間の生活にゆとりと多様な活動の場をもたらすだろう相乗効果も期待したものです。 この建設に行政からの補助金はありません。「定員を増やすとか増収を計れるわけでもない事業をよくやりますね？」というのが行政のスタンスでした。

建設にあたり 1 番の問題は、昨今の物価資材高騰のあおりを真面に受けた建設費にありました。極小規模というハンデと災害時の避難施設としての要件を背負い、出された数字への理解に役員は多くの時間を必要としました。設計監理は新建会員で気心の知れた小杉さんが丁寧に設計から工事監理を指導され、施工は木造大好きと自認する工務店に恵まれ若き棟梁のもと予定通り完成することができました。

隣接するパン工房 TOMO と一体の景観は地域環境の整備にも寄与し喜ばれています。

（鈴木武）

「ともの家新活動室」概要

- ・用途：重度心身障がい者の通所型の日常生活を支援する事業所
- ・延床面積：約 25 坪 木造在来工法 2 階建て 構造：耐震等級 3 と同等の強度
- ・所要室：大活動室、一人用活動室、倉庫 3 室、トイレ、シャワー室+更衣室、バックヤード
- ・利用人数：職員と車いす利用者も含めて 15 人を想定
- ・利用時間：9:00～18:00（毎日ではなく、現在の稼働率は 50%程度）
- ・防災設備
 - ・太陽光発電 6.4kw と蓄電池 14.9kwh を設置
 - ・水はペットボトルを備蓄（将来的に井戸水を予定）
 - ・屋内用と屋外用の防災倉庫を一般倉庫とは別に配置して防災用品を備蓄
- ・利用目的
 - ・既存本部の利用者数が多い時や、日々の活動にゆとりのある変化を与えるため。
 - ・災害時の避難所として、利用者だけでなく近隣にも開放するように考えている。
 - ・利用者だけでなく、父母の会、支援者などを対象にした各種イベントを行う。
 - ・隣接する同法人が運営しているパン工房で働く仲間の休憩に使う。
- ・設計期間： 2023.6～2023.10 工事期間：2023.12～2024.6
- ・建設資金： 法人の自己資金と寄付金

[感想]

今回の設計は、新建の仲間であり法人の理事を務めている鈴木さんの推薦で行うことができました。私は障がい者施設の設計は初めてでしたが、鈴木さんが設計及び現場の定例会議には毎回参加され、運営側との調整やアドバイスを頂き大変助かりました。

運営者側の今までの地域に対する地道な活動から、地域に溶け込み大切にされてきたことを工事中にも強く感じることができました。隣接するパンとお菓子の店も、地域には固定客が多いようです。地域に開かれた障がい者施設をと望む声も一部にはありますが、まだまだ一般的な理解にはなっていないと思います。しかし、地域の中で自然に生活し存在する必要施設であることはとても大切なことだろうと考えます。

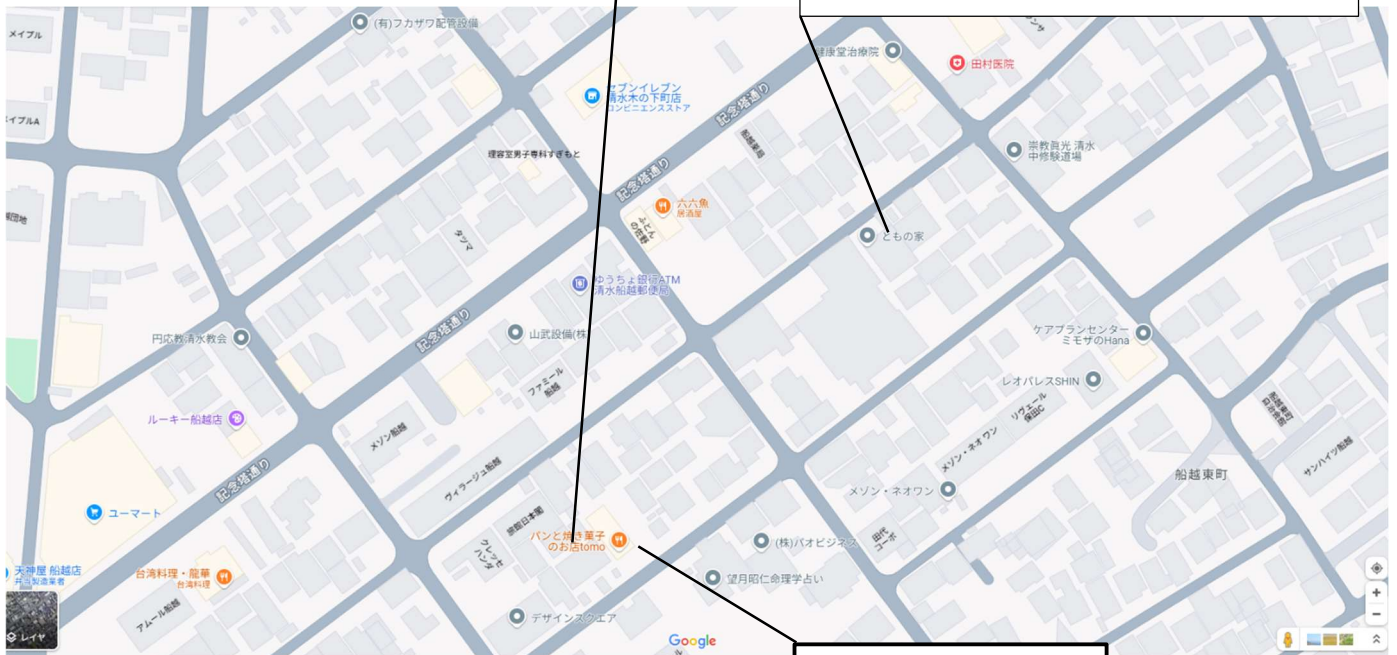
施設の利用者はそれぞれ体型が異なるから当然車いすや補助具の大きさや使い方も違います。そのため一般的な障がい者仕様では通用しないので細かな調査が必要です。まさに住宅設計と同じと思います。

設計者としては、今回の法人の例は非常に恵まれた中での経験であったように思えました。

[建築設計について]

パンと焼きお菓子のお店 TOMO (2016～) 就労支援 B 定員 10

ともの家活動室 本館 (1994～)
 重度心身障がい者の生活介護事業所 定員 20 名

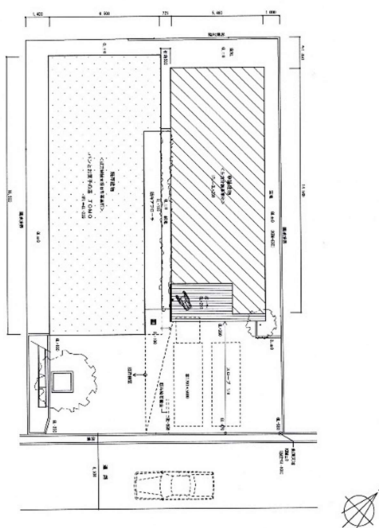


2024 新ともの家活動室

今回の建設場所は、既存の「ともの家」から 180m 程の距離にある法人が運営するお店パン工房 TOMO の敷地内に増築した。法人は他にも同市内に小規模のグループホームを 2 か所 (定員 6 名と 7 名) 運営している。少し離れた場所に施設が分散していることは、利用者にとっては色々と変化のある活動ができたり、建物が小規模であるのは周辺環境に馴染み易くなる利点があると考えます。



設計前調査



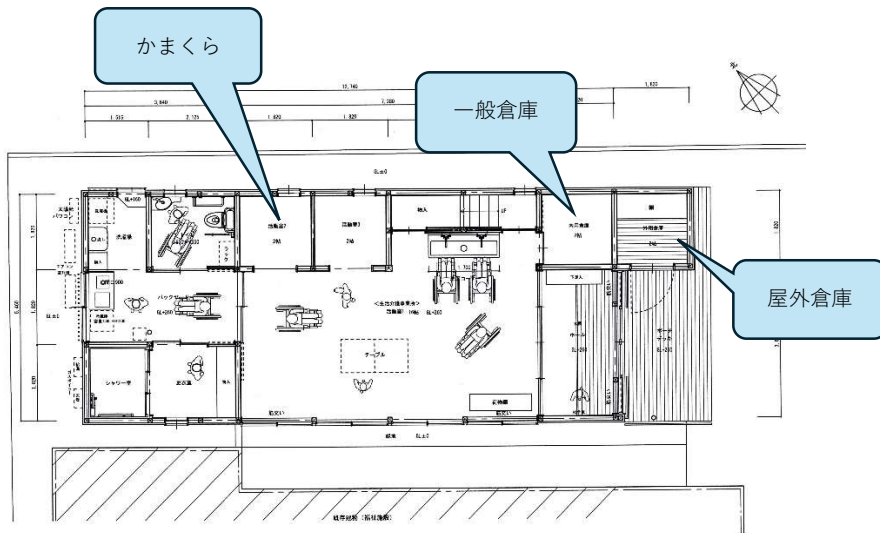
配置図



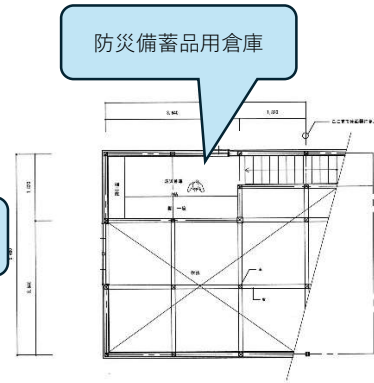
平屋に見える小さな建物

隣接する住宅地への配慮から、建物が平屋に見えるよう高さを抑え、日照の影響がある北側の住宅との距離は 1.8m 程度空けている。既存パン工房との調和については、素材や色彩は同一とはせずに関係性を考慮しながら、周辺の住宅地に溶け込むような単純さや美しさを感じさせる「小さい家」をイメージしている。

1階平面図



2階平面図 (小屋裏の様)



18帖の広い活動室



2帖の個室 (通称かまくら)



防災備蓄品用倉庫

[設計上のエピソード]

- ・昨今の建設費の高騰は、はじめ施主側との予算のズレがあった。(具体的にはコロナ以前の予算を考えられていたように思う。) 施主側の希望を取り入れた基本プランでは延べ床面積が30坪程度になってしまい、予算上5坪分を小さくするには皆の苦渋の選択があった。
- ・活動室の要望はパーティションで仕切ることができる大きな部屋⇒カラオケボックスの様に1人でこもれる部屋が落ち着くかもしれないと運営側の若いスタッフからの意見で「かまくら」を二部屋設けた。まずは好評。
- ・活動室の天井は高くしてほしい⇒どの位の高さが適当か考えたが、天井を設けずに小屋組みを表す空間とした。大勢の人が集まっても圧迫感がなく良かったが、耐震等級3相当の水平剛性の確保にはネックとなった。
- ・温かみを感じる建築を要望⇒施設感(個人的な見解の相違はあるが)を少なくする⇒構造を木造在来工法としてスケール感や軸組に住宅の様な雰囲気を出した。
- ・内装材は自然素材にしたいが管理上は清掃の方が優先⇒利用者が触れることが少ない場所に木材を使いその他はビニル系とした。天井は吸音を兼ねて有孔シナ合板としている。木材を使った面積は多くないが、真壁納まりや小屋組みの無垢材などの効果はあったと思う。
- ・ディテールとして、引き戸は修理しやすい通常の下荷重式にし、車いす用の手洗いシンクは細かな要望に応えるためステンレス製オーダー品とした。

(小杉剛士)